

書評

ベル・フックス『ブラック・フェミニストの主張一周縁から中心へー』（勁草書房）

クリスティーヌ・デルフィ『なにが女性の主要な敵なのかーデヴィカル・唯物論的分析』（勁草書房）

いままで、何冊かのフェミニズムに関する本を読んできましたが（実を言うと障害者問題関係の本よりもフェミニズム関係の本の方をより多く読んでいます）、確かに、なんどもなんども部分的に共鳴することはかなりあるのですが、総体的にこれだというような本に出会った感じがありませんでした。私が男で、共感が薄くなるのかとの想いもあったのですが、論点がちっとも深まっていかないという感じがしていたのです。この二冊はかなり共鳴することの多い、これだと思った本で、フェミニズムの基本文献に数えられていくと想っています。デルフィの名前は以前から挙がっていましたが、翻訳が今ごろになって出たのが不思議に思えます。ベル・フックスも訳者の紹介に「アメリカのフェミニズム界における重要人物の一人。」とありますが、これから世界的に評価されていくでしょう!?

ベル・フックス『ブラック・フェミニストの主張一周縁から中心へー』

（勁草書房）

ベル・フックスのこの本、ちょうど金欠時で、買うときに迷いがありました。フェミニズムと人種・民族問題の交差するところでの議論が、往々にしてナショナリズム的なところでのフェミニズムのとらえ返しというような理論が多く、差別の根源的なとらえ返しに至っていない理論が多く、この本もそういう類いの本ではと先入観がありました。だから、出された直後には一回パスし、それでもフェミニズムと民族・人種差別の交差する所の理論として一度読んでおかななくてはと買った後も、他の本の後に回して暫く積ん読していました。

フックスの理論は、差別を根源的にとらえ返そうとしてところで、フェミニズムと人種・民族問題をつなげて、しかも他の差別の問題との関係も押さえようという姿勢がつかぬかれています。圧巻は、フェミニズムを「平等を求める運動ではない、性差別の抑圧をなくするための運動」という規定の仕方をしていることです。アメリカの反差別運動は、そして世界的にも往々にして、平等や機会の均等を求めるところに収束しがちですが、フックスは差別の構造そのものを問題にしています。また、敵か味方かという二分法的な排外主義も越えて闘おうという姿勢を貫いています。「力の見方を変える」という章では、力や能力ということに関する反差別運動の即自的な反発を越える内容を突き出していて、この本が今後のフェミニズムの方向性に大きな影響を与え得るのではないかと、また反差別というところでも貴重な文章として、多くのひとたちに読んで欲しいと想いました。

それでも、いくつかの疑問はあります。暴力論やゆるやかな革命という論理です。運動を意識の革命というようなところに収束させているのではないかというような感じをもちました。フックス自身が差別の問題を深く押さえているところから、なぜこのような論が出てくるのがちょっととらえられません。労働論や差別の根源的なとらえ返しが落ちて

いるのでしょうか?!

もうひとつは、この本の表題です。原文の主題では、『フェミニズムの理論』となっています。この原文の表題は、「差別の問題を根源的にとらえかえそうとするフェミニズム、それこそがフェミニズムだ。」というような、著者の意志が示されていると思うのですが、これがフェミニズム一般でなく、ブラック・フェミニズムという個別性を突き出す表題にしたのは、明らかな誤訳だと思うのです。ですが、誤訳に引かれて読むひともいるという意味では、意味ある誤訳かも知れないのですが、・・・。

疑問点や反論があると、そこからその本全体に失望感がひろがりがちなのですが、この本は、それでも是非読んで欲しいと思う本です。

クリスティーヌ・デルフィ『なにが女性の主要な敵なのかーラディカル・唯物論的分析』
(勁草書房)

デルフィの名前は、あちこちで見えています。文章も部分的な引用をどこかでみえています。しかし、まとまったものは読んでいないで、マルクス主義フェミニズムの論者というようなとらえ方をしていました（実を言うと、これまでマル・フェミに関する文は何冊か読んでいるのですが、よくとらえきれずにいました。資本制と家父長制に関して、マル・フェミの内部でも二元論か一元論かという応答があるのですが、論点がつかめなかったのです）。この本では訳者は、デルフィをラディカル・唯物論者というようなとらえ方をしています（本の表題の「ラディカル」という語は訳者の挿入です）。余計に分からなくなる規定です。ラディカル・フェミニズムが家父長制を問題にしているかどうかをメルクマールにしている、マル・フェミは家事労働を再生産領域の問題としてとらえているかどうかをメルクマールにしているととらえると、マル・フェミもラディカル・フェミに違いないのです。ラディカル・フェミがマル・フェミであるかどうかは別問題です。デルフィは再生産領域という存在を否定しているので、マル・フェミではないというこの本の訳者の規定のようです。ですが、そもそもデルフィは資本制と家父長制の二元論をとっているのです。そこで、なぜ再生産領域の否定に陥っているのか、よく理解できないでいます。そもそも二元論に陥るといのは、家父長制に対峙するのは、資本制ではなく、商品経済体制ということで、それを資本制と対峙したが故に、家父長制の先行、根源性を主張することになるのだと思うのですが、そのあたりは、ひとの生きる営為が分割されていくことの中で、労働や家事労働が分割され浮かびあがっていくこととして押さえる必要があると思います。そのようなところまでとらえると、二元論というのはおかしいのではないかと思います。もっとも、家事労働の不払い労働としての性格ということをとらえ返すには、家事労働という概念が必要であったし、そのとらえ返しがなくしての一元論や、従属論としての一元論が誤りであるとも言えるのですが、そのような労働概念のとらえ返しや、そもそも生きる営為が分割されていくこと自体をとらえ返したところで、二元論を止揚する必要があるのではなどと想っています。デルフィの論点にはその他のいくつかの疑問があります（性差別

を階級概念でとらえることなど)。それでも、その疑問や批判を越えて、その唯物論的分析の鋭さには、共鳴すること多々ありました。もっと早く読んでいたら、フェミニズムに関するもやもやした疑問がもっと早く解けていたのにと、何かかなりすっきりしてきました。尤も問題はもっと深いところにあり、「すっきりした」というのは理解が足りないところでの錯覚かも知れませんが・・・。

もうひとつ押さえて置きたいのは、最近「社会主義国家」の崩壊以降、マルクス葬送ということが叫ばれ、唯物史観そのものを全否定するような動きになっています。その中で、この70年代に書かれた文が、逆に新鮮味をもって唯物論の意義を示していると思うのです。教条的で、「ただものろん」的な「唯物論」は、徹底的に批判しきらねばならないし、そもそもひとの名前を冠して「〇〇主義」（ここではマルクス主義）とするようなカリスマ的な持ち上げ方や、権威的押し付けが、起きて来たこと自体を反差別の立場から批判する必要があるのですが、現在的に唯物論をもう一度とらえ返すことなしに、差別の問題、様々な矛盾の分析はなしえぬだろうと、あらためてこのデルフィの著書を読みながら、想っています。